

ペンシャワール会現地活動報告会

人・水・命

アフガニスタン・

パキスタン北西辺境州にて

今なお、戦渦と大干ばつに苦しむアフガニスタン。ペンシャワール会は、この地で、さまざまな困難を乗り越え、27年にわたって支援活動を続けてきました。今回は、看護師として現地で18年間医療支援に取り組み、中村哲医師を支えてきた藤田千代子さん（2010年3月第38回医療功労賞・海外部門受賞）をお迎えして、アフガンの現状と人々の思い、国際支援のありがた等をお話していただきます。

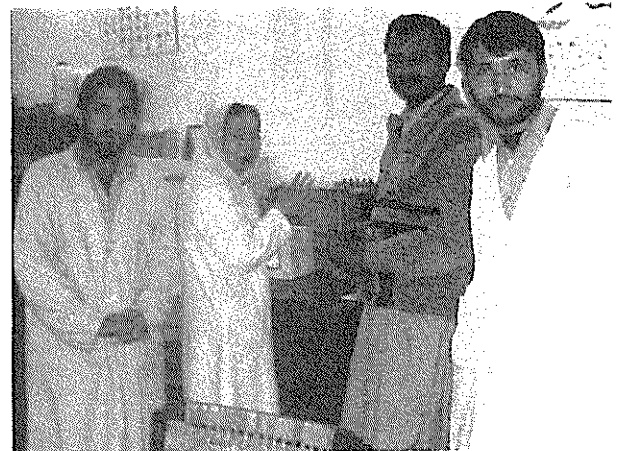
日時：10月30日（土）午後1時～3時

場所：せんだいメディアテーク
7階スタジオシアター

入場 無料

主催：ペンシャワール会をみやぎから応援する会
財団法人仙台国際交流協会補助事業

問い合わせ 電話 080-6055-2366
E-mail pemiyagi@gmail.com



同時期開催 ペンシャワール会現地活動写真展「人・水・命ー27年のあゆみ」
10/13～20 仙台市福祉プラザ2階展示ロビー（18日休館日）

藤田 千代子さん 51



撮影・中嶋基樹

顔

福岡市の民間活動団体(NGO)「ベシヤワール会」が建てたパキスタン北西辺境州ペシヤワールの病院を拠点に、1990年から18年間、貧困層やアフガニスタン難民を看護した。

福岡県内の病院に勤めていた88年ごろ、会の現地代表・中村哲医師(63)が講演に訪れ、「イスラム教徒の衣装ブルカをかぶった女性の病気は発見しづらい」と女性の助けを求めた。「尊敬するマザー・テレサのような仕事ができると思った」。パキ

スタンの場所も知らずに、その場で赴任を申し出た直情家だ。

男女隔離のイスラム社会。女性患者を一手に引き受けた一方で、男性の患者や職員には手こずった。笑いかけても見つめてもだめ。「ガミガミ言うことにした。真剣さが伝わって信頼が深まった」

1日200人の患者を世話し、病人が待つ山村を馬で巡回した。その後現地の治安が悪化、一昨年に一時帰国した。劣悪な医療環境を思い、患者を置き去りにした気分だった。

現在、福岡市のNGO本部から電話で現地を指揮する。「じれったい。戦火がやめば飛んで行きたい」と苦しい胸の内を明かす。

(西部社会部 豊浦潤一)